

3) キョウチクトウ=夾竹桃

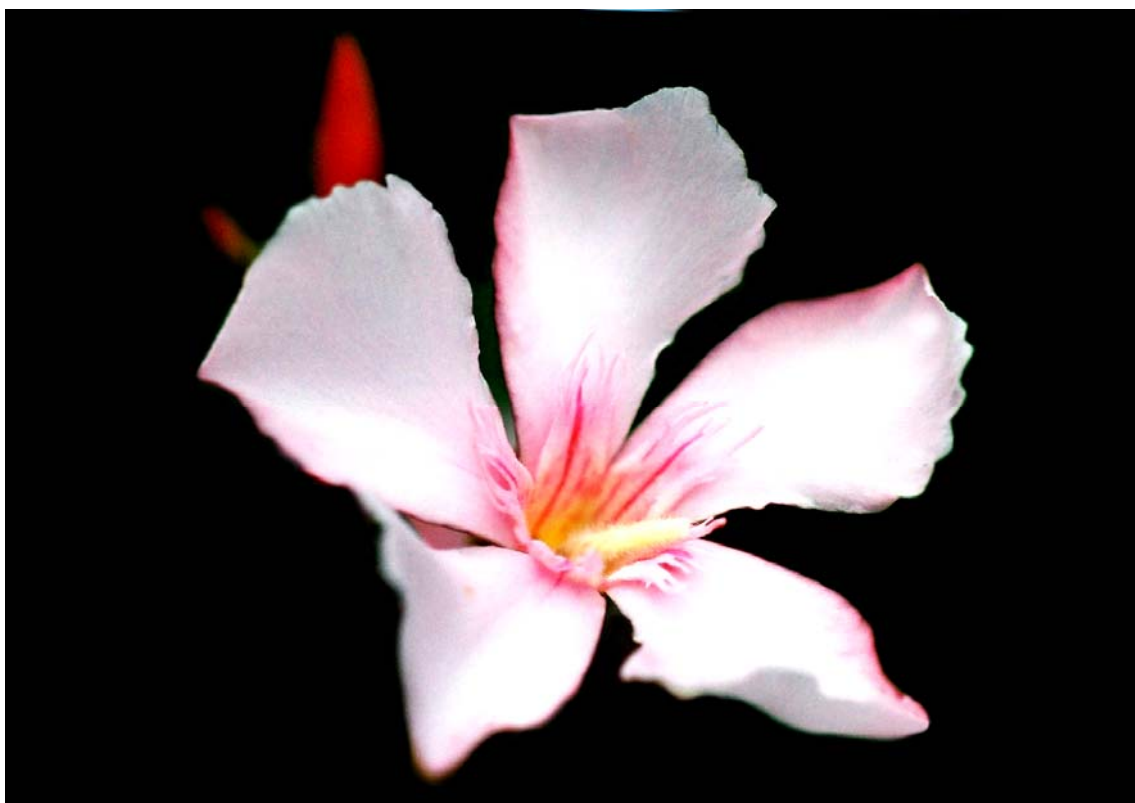
キョウチクトウはキョウチクトウ科の常緑低木である。原産地はインドで高さは3mほどになり、関東以西の暖かい地方では観賞用として、庭園や公園などに植えられる。主に熱帯地方に分布し、世界では150属1,500種が知られており、日本には8属11種がある。テイカカズラもハワイやタヒチでレイに使われるプルメリアも同じ仲間に入り、これらの花も夾竹桃と同様に熱帯地方の仏経寺院などでよく栽培されている。葉は「夾竹桃」といわれるように「竹」に似た形をしており、これが和名の由来にもなっている。学名は『*Nerium indicum*』で、属名はギリシャ語で「湿った」という意味である。花は桃色系の他、濃紅色、白、淡い黄色などがある。これは地中海周辺に自生する西洋キョウチクトウの改良種で、花色が豊富なことも特長になっている。花の直径は4cmほどで、5枚の花弁は風車のように回旋状に重なって平開する。八重のものと一重のものがあり、この花の場合は一重の方が何とも涼しげである。イギリスでは『oleander』とか、『rosebay』といわれている。ここでいう「bay」は「入り江」という意味ではなく月桂樹のことである。この『oleander』はシェークスピアの物語にも登場するのだが、フランスでは『laurier-rose』で、これは『rosebay』と同様に月桂樹のバラという意味である。これも葉の形が月桂樹に似ているからであろう。

キョウチクトウの葉や茎、根にはオレアンドリン(oleandrin)や、ネリアンチン(neriantin)などという配糖体が含まれており、古くから強心剤や麻酔薬として用いられてきた。しかしこの配糖体は毒性も強く、処方間違えると中毒することもあり大変危険である。このため古代インドではこの木の枝を口にして自殺したり、墮胎するときにも用いられた。また『普仏戦争』(プロシャ・フランス戦争=1870.7.~1871.5.)の時に、兵士が夾竹桃の枝に肉を刺して焼き、この肉を食べて死んだという記録もある。日本でも『西南戦争』のときに、この木の枝で箸を作り弁当を食べたところ、中毒症状を起こしたという。また昭和44年には佐世保市がこの花を市の花に指定し植栽を奨励したところ、牛がこの葉を食べて死んだという話もある。

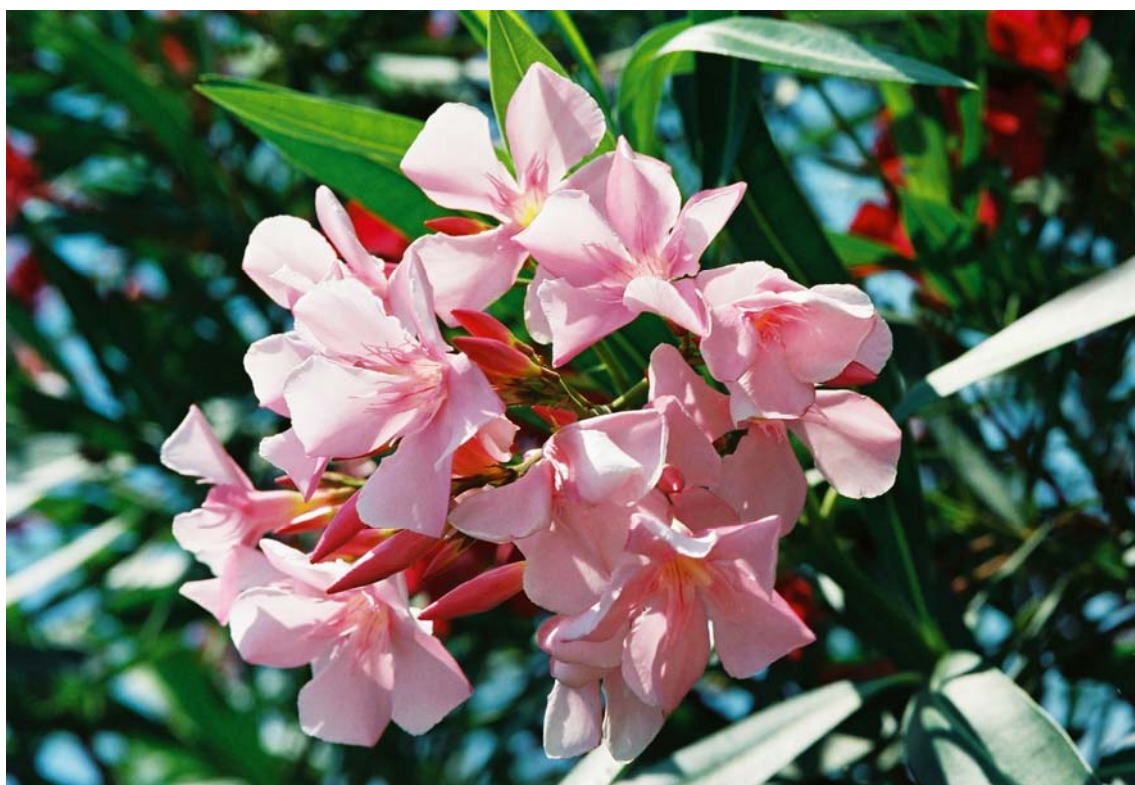
キョウチクトウが日本に渡来したのは寛政年間(1789~1801年)で、中国を経由して日本に入ったものと思われる。古代インド医学の原典である『チャラカ本集』では『歌羅毘羅樹』(カラビラジュ=karavira)の名前で表されており、インドでは罪人はこの花で作った花輪がかぶせられたという。これも毒性を知ってのことであろう。また死者を火葬場を送るときには、この花で顔を覆ったともいわれている。強い毒性を利用してハエなどの小昆虫がやってくるのを防ぐためのものと思われる。イタリアやギリシャでも葬式の花とされており、中国では邪気を払う植物として寺院などに多く植えられた。常緑樹であるところから防風林に植えられることもある。

夾竹桃 深閑たるに 人を憎む

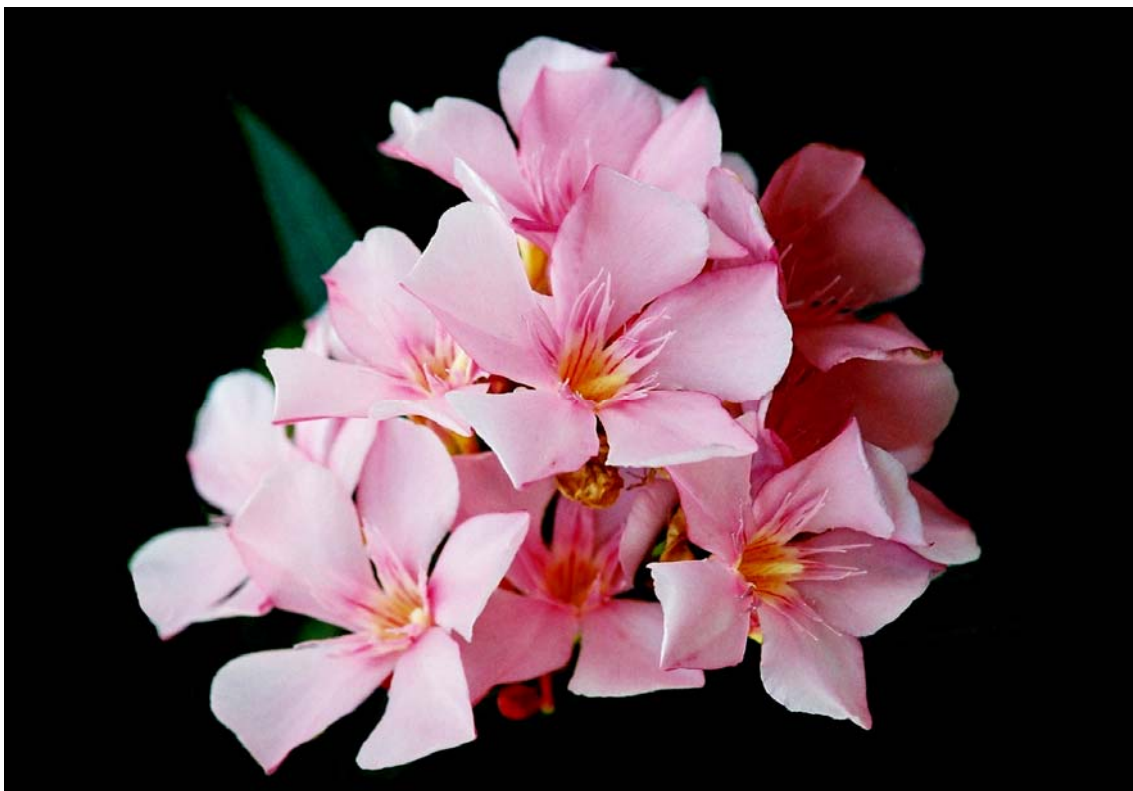
これは中村草田男の句だったろうか。繁殖は挿木でよく活着する。



淡いピンクのキョウチクトウ。よく見るとプロペラか風車のような螺旋状の渦巻きが見える。これはキョウチクトウ科の特徴で、テイカカズラもデブラデニアも同様である(埼玉県東松山市)。



淡いピンクのキョウチクトウ(埼玉県東松山市)。



淡いピンクのキョウチクトウ、夏はこのぐらいの色みが涼しげでいいのかも…。もう少し色が濃い紅色で、八重咲き種もあるのだが、この季節やや暑苦しい感は否めない。



濃い紅のキョウチクトウ(さいたま市浦和区)。



一重咲で赤の濃いキョウチクトウ。まさに南国の花である(埼玉県東松山市)。



淡い黄色の八重咲キョウチクトウも涼しげではある。しかしキョウチクトウは通風がよくないと、花梗やツボミにアブラムシがよく付く(埼玉県東松山市)。



白の八重咲キョウチクトウ。(埼玉県東松山市)



涼しげな純白で一重咲のキョウチクトウ。派手な花ではない分、白の夾竹桃には清清しさがあって、夏のうっとうしさを、ひと時解放してくれる(埼玉県東松山市)。



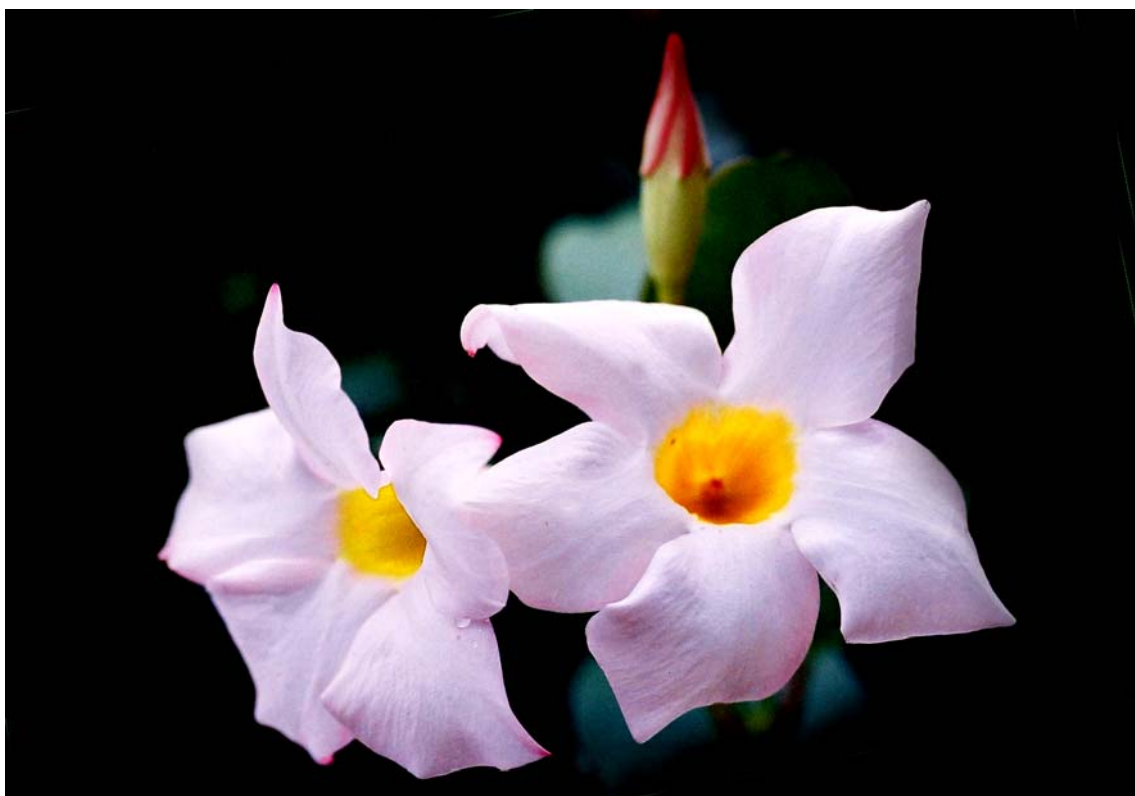
最も普通に見られるピンクの八重咲キョウチクトウ(さいたま市緑区)。



近縁種のデプラデニアは、最近よく路地にも植えられているが冬の寒さには弱い。



越冬できる年とできない年があるようで、屋外で育てるのはいわば賭けである。しかし梅雨の頃から秋風が心地よい頃まで、よく花を咲かせてくれる。一年草のつもりならいいのだろう。



デプラデニアは色彩も豊富で、温度の管理さえ気をつければ、よく花を咲かせてくれる。



デプラデニアは東京付近では屋外で越冬できない植物だった。しかし最近の温暖化で、路地植えでも暖冬だと越冬する。敷き藁をして蔓を布地で覆ってあげれば、越冬の確率はずっと高くなる。それでも枯れてしまったら可愛そうだが、諦めてまた植えるより仕方ない。 [目次に戻る](#)